

氏名	GUARIN LEON NICOLAS
ヨミガナ	グアリン レオン ニコラス
学位の種類	博士（映像）
学位記番号	博映第15号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 自伝的アニメーション・ドキュメンタリー ～個人の記憶と体験をアニメーションで表現する～ 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	山村 浩二
(論文第1副査)			()	
(作品第1副査)			()	
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	布山 タルト
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	桐山 孝司
(副査)	京都精華大学	教授	()	相内 啓司
(副査)	新潟大学	准教授	()	キム ジュニアン
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

In this dissertation, I aim to study a category of films called autobiographic animated documentaries and discover how animation can be used for the representation of personal memories within documentary context. This, in order to gain applicable knowledge to reflect on my own art practice and expand the available studies on the animated documentary genre.

To accomplish this goal, I start by doing a revision of the academic literature on the animated documentary subject in the first chapter. Here, I demonstrate how there is a general dissent on the definition of the term 'Animated documentary', also confirm the existence of a long history of animation use within documentary context, and conclude that animated documentary is the product of a new contemporary way of understanding documentary film.

In the second chapter, I pose the necessity of redefining the term 'Animated Documentary' and, as necessary step towards that goal, give specific definitions of 'Animation' and 'Documentary'. Here, I propose understanding animation as a cinematographic form and documentary as a nonallegorical film genre. Then, based on these concepts, I review the definitions of 'animated documentary' given by other authors and propose a new one in the third chapter. Here, I define the animated documentary as a film genre where animation is used coherently in order to represent the real world in a non-allegorical, subjective and truthful way.

In the fourth chapter, I analyze six autobiographical animated documentaries to discover how

animation can be used in this kind of films. From this analysis, I conclude four main objectives of the use of animation: First, represent past events that do not have records; Second, represent aspects of reality that cannot be photographed; Third, give new meaning to available archive images; And fourth, represent stories in which the archive images and the live action footage available is not enough to represent the author's vision.

Additionally, I conclude that the use of animation strengthens the subjective character of the cinematographic representation and, at the same time, alters the modality and the magnitude of the images on screen. For this reason, many directors of animated documentaries try to demonstrate their works' documentary status using different recourses like: the use of original audio recording, the inclusion of archive material, and the insertion of explanatory titles in their films.

In the same chapter, I also get to the conclusion that the spectator of this kind of films experiences two contrary perceptions. On one hand, it feels more skeptical towards the images and, in the other hand, it becomes a better listener. I confirm in this dissertation how the use of animation creates a spectator more critical towards the image, but at the same time more attentive towards the voice of the people represented in documentary films.

Finally, in the fifth chapter, I explain the relation between my artistic work and my research on animated documentary. To do so, I first describe the origin of my latest project called *The Missing Shoelace*; second, I explain the reasons why I decided to make this film as animated documentary; and lastly, I describe how my investigation has influenced this film's creative process.

Keywords: animation, documentary, autobiography, media studies, film genre

本論では「自伝的アニメーション・ドキュメンタリー」とは何か、そしてドキュメンタリージャンルの中でどのようにアニメーションが個人の記憶と体験を表現するために使用できるのかを研究している。これは、自身の芸術活動に適用できる知識を得て、アニメーション・ドキュメンタリーのジャンルの研究を拡張する目的がある。

その目的を達成するために、まず第1章の中でこのテーマについての研究文献を調査し、そして「アニメーション・ドキュメンタリー」について言及した様々な人々の間で定義に関する意見の相違があることを導き出した。この用語を再定義する必要があると明らかにした後、第2章で「アニメーション」と「ドキュメンタリー」それぞれの定義をあげる。

これらに基づいて、第3章で独自の「アニメーション・ドキュメンタリー」の定義を提案する。アニメーション・ドキュメンタリーとは、アニメーション（様式）が作品の一貫性を保つために重要な役割を果たすと共に、寓話的でない形で、監督の視点を通し、現実の人、場所、出来事を誠実に表現する視聴覚作品である。

第4章では自伝的アニメーション・ドキュメンタリーの概念を紹介し、そしてアニメーションが映画のためにどのように使用できるのかを明らかにするため、6本の作品を分析している。その結果、主に四つの目的を達成する際に、アニメーションが使用されていると結論する。一つ目は、記録のない出来事を表

現するとき。二つ目は、撮影ができない現実の側面を表現するとき。三つ目は、存在しているアーカイブに新たなニュアンスを加えるとき。四つ目は、アーカイブや実写再現シーンでは十分に表わせない個人の内面の物語を表現ときである。

さらに、アニメーションは映画表現の主観的特性を強化すると共に、映像の「モダリティ」とその「重大さ」に影響を与えると結論する。したがって、様々なアニメーション・ドキュメンタリーの監督は、自らの作品のドキュメンタリー・ステータスを証明するために、客観性を高める技法を使っている。例えば、音源の使用、アーカイブ映像の引用、説明的なタイトルを入れることなどである。

同章では、アニメーション・ドキュメンタリーの鑑賞者の意見に二つの相反する変化がおきると結論する。鑑賞者は映像を疑う目で見えるようになるが、音を率直に聞くようになる。アニメーションの使用は、映像に対してより批評的な鑑賞者を生み出すが、同時に登場する人々の声に対してより魅力される鑑賞者を生じる本論を確認した。

最後の第5章では、自身の芸術活動及び『The Missing Shoelace』という研究作品が、私のアニメーション・ドキュメンタリー研究にどのように関係しているかを詳しく説明する。この目的を達成するために考えた研究作品のもととなるアイデアや、何故アニメーション・ドキュメンタリー形式でこの作品を語ることにしたのか、そして私の研究がどのように『The Missing Shoelace』に影響を与えたかを明らかにしている。

キーワード：アニメーション、ドキュメンタリー、自伝、映像メディア学、映画ジャンル__

(総合審査結果の要旨)

グアリン ニコラスは、近年映画祭などで注目が集まっているアニメーション・ドキュメンタリーの調査・研究と並行して、長年制作の機会を温めてきた自身の自伝的作品「The Missing Shoelace」を完成させた。彼はコロンビアでシネマペリテを基本に学んだドキュメンタリーの知識と、卒業のTV番組制作で実践を積み、来日後は、京都精華大学大学院で学んだ後、東京藝術大学の博士課程に進学した。

論文では、まずアニメーション・ドキュメンタリーの定義付けという難題に挑戦した。アニメーションとドキュメンタリーそれぞれの定義付けを多くの資料によって検討し、アニメーションをフォルム(表現形式)であり、映画の韻文と結論付けた。審査会では、この概念定義がドキュメンタリーに立脚しすぎているのではとの批評も出たが、アニメーションの定義の情報まとめは、近年真剣に研究されていない部分で、有意義なものだった。最終的には、アニメーション・ドキュメンタリーの定義に関しては彼独自の提案があった。

ドキュメンタリーの必要項目の一つとして検証された現実とのインデクシカリティの問題は、研究の結果から、実作で、自作の中で自分をイメージとして描かない、音声も自分以外の役者に演じさせるという表現の実験に至った。

完成した作品は、作画技量の問題で消化しきれなかった所もあるが、全体にうまく構成され、青春映画としても高く評価できる。先行研究のリサーチは、先行研究もすくなく、資料的価値も大いにある。独自の見解も導きながら、自作をしっかりと論文の文脈に収めた研究方法のいい前例となっている点で評価が高く、全員一致での合格となった。